

## ひとすじの道 城ノブ

一九一五（大正四）年、年の瀬のある日。ノブの手には、よれよれになった新聞が握られていた。それらに何度も何度も繰り返し読んだその記事のことが、ノブの脳裏を離れなかった。

淡路島洲本から神戸に向かう定期船で若い女性が二歳の幼児を抱き、海へ身を投じた。嫁いだ先の家庭での居場所を失い、絶望してのことだったと、その記事は伝えている。

ノブは、その記事のことが頭の中から離れず、胸が痛んだ。

このような人たちのために、自分にできることが何かないだろうか……。

ノブが新聞の記事に衝撃を受けていたころの日本は、第一次世界大戦の影響で、社会も混乱していた。まだまだ女性の社会的地位は低く、男性が圧倒的に優位な社会で、海に身を投じた人のように、つらい思いをしている女性が、たくさんいたのだ。

城ノブは、新橋から横浜までの鉄道が開業した年、一八七二（明治五）年に伊予（現在の愛媛県）に生まれた。父は長崎の鳴滝塾でシーボルトに学んだ医者だった。ノブは幼いころから神童といわれるほど才能があり、女子に学問など無用とされる時代に、松山女学校に学びながら漢学の塾へも通った。学校と塾がある松山の町は家から三里ほど離れていたが、ノブは歩いて通った。遠い道のりを女子の一人歩きは危険だと、はかまをはいて男子の格好をして通ったといわれる。

松山女学校でキリスト教と出会ったノブは、在学中に洗礼を受けた。しかし、まだまだ世の中は異国の宗教に寛容ではなく、西洋医学を学んだ父でさえそれを許さなかった。ノブは、家を出た。

その後、日本各地で伝道や教師などの仕事をし、年号が明治から大正になった年、ノブは神戸にやってきました。同郷の人が経営する神戸養老院でお年寄りの世話をすることになったのだ。この時からノブは、生涯を神戸の地で過ごすことになる。

年が明けた。

ノブはまだその記事のことが頭から離れなかった。養老院での仕事を終えると、毎晩、そのことを考え続けていた。

「世の中には、この人のように虐げられている女性がたくさんいるに違いない。このような人たちを救うために、私にできることはないのだろうか……。」

ある晩、ノブはふと、新聞を握りしめている自分の手を見た。

「そうだ、この手だ……。」  
自分が行動すればよいのである。

「この手を、辛い思いをしている女性たちに差し伸べることができないではないか！」  
そう考えると、ノブはもうじつとはしていなかった。さっそく神戸の下山手通に小さな

家を借り、女性たちが身を寄せるための居所を準備した。一九一六（大正五）年のことである。

ノブが次にしたことは、世間でも話題になった。境遇に悲観して自ら命を絶つ女性がたくさんいることから、須磨の海岸に、

「死なねばならぬ事情のある方は、一度来てください。ご相談にあずかります。」  
と書いた立て札を掲げたのだ。

一度きりの人生を、あきらめないでほしい。

不幸な女性たちを救おうと、ノブの懸命な活動が始まった。

その冬の、ある夜のことである。冷たい雨が降っていた。

一人の女性がノブの小さな家の前に立った。

青白い顔をして、ずぶぬれの全身が震えていた。

ノブは静かにうなずき、女性を家の中へ招き入れた。そして胸に抱き寄せ、

「よくここまで来てくれました。」

と、ささやいた。ノブのぬくもりに、女性は声を上げて泣いた。

「さあ、今夜は早く休みなさい。明日、ゆつくり話を聞きましょう。」

ノブは女性の身体を手ぬぐいでふき、床に就かせた。

一夜明けて、ノブは女性の手に自分の手をやさしく重ねた。ノブの手のぬくもりがじんわりと女性に伝わっていった。その女性は静かにこれまでのことをすべてを話した。

「よく話してくださいましたね。もう心配いらないわ。しばらくここでゆつくりなさい。」

その日から、女性は、ノブの小さな家の住人の一人となった。

ノブに救いを求めてやってくる女性は、あとを絶たなかった。子供を連れている者も多かった。ノブは一人一人に寄り添い、語りかけ、話を聞き、そして心で包み込んだ。

過酷な借金の取り立てや、残酷な暴力から逃げてきた女性もいた。追っ手がやって来て、ノブに詰め寄ることもあった。しかし、ノブはひるまなかつた。両手を広げてすさまじい気迫で立ちはだかつた。

やがて、家の中に女性たちの笑い声がもれ、子供たちの元気な声が響くようになった。

「しかし……」とノブは思案した。

この家は、彼女たちが逃げ込んでくる一時避難の場所ではあるが、いつまでもここに居てよいものではなかった。新たに生きていく道を求めなければならぬ。ノブは、自分の仕事は女性たちを自立へと導くことだと思っていた。中には、駆けこんできて怠惰な生活を送ったあげく出て行き、結局昔と変わらぬ生活に戻り、音信不通になってしまふ者もいた。これでは、意味がない。

女性たちが本当に救われる道はないものか。ノブは多方面に声をかけ協力を要請した。

そのかいもあり、ノブの活動を理解し、支援してくれる人たちが現れてきた。少しずつだが、女性たちの働く場を見つけることができるようになってきた。

あの夜、ずぶぬれになってやってきた女性も、紹介を受け、地方の女学校の教師の職を得て、この家を巣立つことになった。

「これからですよ。しつかり生きるのですよ。」

ノブは、並んで立つ彼女の背中をそつと押した。

「ありがとうございます。」

彼女を見送りながら、ノブはまっすぐな坂道の遠く向こうに見える海を見た。深々と頭を下げた彼女は、何度も何度も振り返りながら坂道を下りて行った。

生きる希望をよみがえらせるために人々に差し伸べたノブの手。あの、よれよれの新聞を握りしめていた手も、年齢を重ね、しわが深くなっていていったことだろう。そのしわの一つ一つに、ノブに救われた人たちの感謝の思いが刻み込まれているに違いない。

ノブは、八十七年の人生を社会に尽くして今、芦屋の墓地に眠っている。  
その墓石には、こう刻まれている。

「受けて忘れず 与えて思わず」  
ノブの、ひとすじの生き方そのものである。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。  
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使  
用することを禁止します。